

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：教育学科

資格：教授

氏名：高木 史人

研究分野	研究内容のキーワード
国語教育, 口承文芸研究, 方言研究, 日本文学	言う, 聴く, 語る, 話す, 歌う, 唱える, 声, 身ぶり
学位	最終学歴
文学修士	國學院大學大学院 文学研究科 日本文学専攻 博士課程後期

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 名古屋経済大学FD委員会副委員長	2012年4月1日2013年3月31日	2012年度は名古屋経済大学FD委員会副委員長を務め、たとえば、(1)毎回、授業後に学生に授業内容を確認する小レポートを課す、(2)毎回の授業内容を500字～800字でまとめさせて翌週の提出を課す、(3)15回の授業終了後に、15回分の授業内容を空欄50箇所のある12000字～16000字の文章にまとめて渡し、空欄に適語を入れさせて授業内容を確認する作業を課す、などをそれぞれ試みた。
2 作成した教科書、教材		
1. 次世代に伝えたい新しい古典	2020年3月10日	井上次夫・高木史人・東原伸明・山下太郎共編、武蔵野書院刊、270 ページ。ISBN978-4-8386-0655-9
2. 幼稚園・小学校教育の理論と方法	2018年2月15日	新幼稚園教育要領、小学校学習指導要領に即した理論の解説と教育方法の具体的提示とを試み、合わせて小中接続の項目を付した。生野金三・香田健治・湯川雅紀・高木史人編、鼎書房刊、192頁。
3. 「基礎演習 I」における建学の精神の教材作成	2008年4月	平成19年度に名古屋経済大学研究書刊行助成を受けて、市邨学園創設者市邨芳樹の著作の全現代語訳（400字×600枚）を行なったが、平成20年度には名古屋経済大学初年次教育委員会委員として、「基礎演習I」の授業改善に取り組み、その中で「名古屋経済大学の建学の歴史と理念」という教材を担当執筆した（400字×16枚）。これは、名古屋経済大学学生の大学に対する理解を高めさせ、学問に対するモチベーションを向上させる試みの一環である。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 教員免許更新講習会講師	2019年8月6日	関西福祉科学大学 教員免許更新講習会講師
2. 「昔話本について」インタビュー	2019年4月26日	読売テレビ 大阪ほんわかテレビ インタビュー
3. ひと2018 「口承文芸の面白さを伝える」インタビュー	2018年7月26日	北海道新聞 朝刊 インタビュー
4. あなたの知らない“昔話”の世界 インタビュー	2018年2月9日	読売テレビ 関西情報ネットten. インタビュー
5. 特別講演「やろか水伝説の想像力」講師	2016年1月31日	犬山市文化遺産活用委員会・NPO法人ニワねっと 「歴史座of犬山街プロジェクト 怪異 やろか水～伝説が語るモノ～」(平成27「歴史座of犬山街プロジェクト 怪異 やろか水～伝説が語るモノ～」(平成27年度文化遺産を活かした地域活性化事業)年度文化遺産を活かした地域活性化事業)愛知県犬山市 国際観光センターフロイデ)
6. 知立市図書館 昔話講演会講師	2015年3月29日	知立市図書館主催講演会。内容「聴くちからをはぐくむために—伝承の昔語りの場から考えたこと—」講師。(於・愛知県知立市図書館視聴覚室)
7. やっとかめ文化祭実行委員会 「やっとかめ文化祭 まちなか寺子屋」講師	2015年10月31日	やっとかめ文化祭実行委員会 「やっとかめ文化祭 まちなか寺子屋」講師。演題「昔話・伝説・世間話」超入門～河童の話をきっかけにして～ 於・名古屋市・on reading書店
8. 平成26年度小牧市公民館名古屋経済大学連携講座講師	2014年6月14日	平成26年度小牧市公民館名古屋経済大学連携講座(小牧市教育委員会主催)お父さん、お母さんのための市民講座「楽しもう子育て」第2回「むかしばなしと絵本」の講師を務める。(於・小牧市公民館)
9. 名古屋経済大学高蔵高等学校公開選択講座講師	2014年3月7日	「テーマ:昔話からライトノベルまで—文学部へのいざない」の講師を務める。(於・名古屋経済大学高蔵高等学校)
10. フジテレビ番組「アゲるテレビ」コメンテーター	2013年8月27日	「テーマ:子どもの教育のために昔話の内容を変えること」のコメンテーターを務める。司会:軽部真一・西尾由佳理アナウンサー、ゲスト:七瀬なつみ。18分枠コーナー。
11. 京都大学人文科学研究所講演会講師	2013年6月21日	京都大学人文科学研究所主催講演会「声の物語、体の物語」の講師を務める。(於・京都大学法学経5号館)
12. 名古屋経済大学高蔵高等学校公開選択講座講師	2013年3月6日	名古屋経済大学高蔵高等学校公開選択講座「テーマ:文法の詩学を考える—文学部へのいざない」の講師を務める。(於・名古屋経済大学高蔵高等学校)
13. 入学前高校生向け共通科目「社会科学入門」講師	2013年2月23日	入学前高校生向け共通科目「社会科学入門」「テーマ:市民生活と児童文学」の講師を務める。(於・名古屋経済大学)

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
14. 第12回全国桃太郎サミット田原本大会講師	2012年9月9日	基調講演「「昔話」を語るということ」の講師を務める。(於・奈良県田原本町青垣生涯学習センター)
15. 第36回日本口承文芸学会大会 市民向け口承文芸セミナー講師	2012年6月3日	第36回日本口承文芸学会大会 市民向け口承文芸セミナー「テーマ: 昔話研究からの問題提起」の講師を務める。(犬山市・犬山市教育委員会後援)
16. 名古屋経済大学高蔵高等学校公開選択講座講師	2012年3月7日	「テーマ: 文学部へのいざない—昔話入門」の講師を務める。(於・名古屋経済大学高蔵高等学校)
17. 大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際教育研究拠点」主催講演会講師	2011年10月13日	大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際教育研究拠点」主催講演会「昔話の立ち上がる時」の講師を務める。(於・大阪大学待兼山会館)
18. 2011年公開講座 犬山オープンカレッジ講師	2011年10月1日	2011年公開講座 犬山オープンカレッジ(名古屋経済大学・名古屋経済大学短期大学部 学術研究センター主催、犬山市教育委員会後援)「やろか水とやろか雨の伝承」の講師を務める。(於・犬山国際観光センター「フロイデ」)
19. 名古屋経済大学高蔵高等学校公開選択講座講師	2010年3月7日	名古屋経済大学高蔵高等学校公開選択講座「テーマ: 昔話入門」の講師を務める。(於・名古屋経済大学高蔵高等学校)
20. あいち国文の会 第112回例会講師	2010年10月27日	講演「昔話研究史譚—國學院大学方言研究会の青春」の講師を務める。(愛知県立大学国文学会主催の市民向け講演会)
21. 愛知県立大学国文学会 あいち国文の会 第1回例会講師	2000年9月9日	講演「市橋鐸と尾北の伝説研究」
22. 審査委員長	2000年11月11日	愛知県消防署長会 愛知県消防署長会消防署員スピーチコンテスト(於・愛知県犬山市 国際観光センターフロイデ)
4 その他		
1. 『記念誌 佐藤健二先生 高木史人先生 還暦記念 日本民俗学講習会 』	2018年5月31日	各講座の執筆者は執筆順に菊地暁、飯倉義之、土居浩、姜竣、山田巖子、川村清志、真鍋昌賢、小池淳一、重信幸彦。閉講の辞は佐藤健二。2017年7月30日に京都大学楽友会館で行われた同名の講習会の記録。いずれも佐藤健二、高木史人の研究に触れつつ、問題を語る。1935年7月31日の柳田國男還暦記念日本民俗学講習会のパロディーとしての催しであった(総ページ数 68、担当ページp. 4-5「開講の辞」)。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 高等学校1級免許取得(科目:国語科)	1983年12月	昭58高1 普第667号(東京都教育委員会)
2. 中学校1級免許(科目:国語科)	1981年3月	昭56中1 普 第8716号(東京都教育委員会)
3. 高等学校2級免許(科目:国語科)	1981年3月	昭56高2 普 第9405号(東京都教育委員会)
4. 学校図書館司書教諭免許	1981年12月	第112645号(東京都教育委員会)
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 私学研修員として東京大学大学院人文社会系研究科に国内留学	2007年4月から2008年3月	私学研修員として東京大学大学院人文社会系研究科に国内留学。 留学の成果として、以下の報告書がある。 ・高木史人「思想としての「昔話集」—フィールドと昔話伝承者像の構築過程について—」『人文科学論集』84号、2009年10月31日、名古屋経済大学人文科学研究会刊(掲載頁P. 1~P. 19) ・高木史人「方言研究と昔話研究—高田十郎の場合—」『口承文芸研究』33号、2010年3月31日、日本口承文芸学会刊(掲載頁P. 25~P. 38)
2. 名古屋経済大学地域社会研究会総合調査口承調査班研究代表者	2002年4月から2006年3月	名古屋経済大学地域社会研究会総合調査(岐阜県旧可児郡総合調査)の一環として行なった(口承)調査。報告書『旧可児郡(口承)資料集』を刊行した。 研究代表者 高木史人 研究分担者 飯倉義之・大橋和華・杉浦邦子・高塚明恵・竹内邦孔・遠志保・野村典彦・藤久真菜
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 次世代に伝えたい新しい古典 — 「令和」の言語文化の享受と継承	共	2020年3月15日	武蔵野書院(本人担当部分)	古典教材およびその教育観の更新を目指した。ISBN9 78-4-8386-0655-9

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
に向けて			p. 199-p. 208 p. 255-p. 264	(全270頁) (編者) 井上次夫・高木史人・東原伸明・山下太郎 (共同執筆者) 井上次夫、津田博幸、ローラン・ウ オーラー、東原伸明、鹿島徹、津島知明、山下太郎 、吉澤小夏、本宮洋幸、横溝博、伊達舞、田村美由 紀、塩村耕、永井清剛、高木史人、木村茂光、ヨー ス・ジョエル (17名) (本人担当部分) 「昔話教材を使った古文入門教育/指導法へ—小中 接続を意識したのための教材n度読みの試み—」 「「昔話」から「昔語り」へ—昔語りを「聴く」姿 勢を幼小接続に活用する」
2. 幼稚園・小学校教育の理論と方法	共	2018年2月20 日	鼎書房 (本人担当部分) p. 25-p. 29 p. 33-p. 38 p. 110-p. 111 p. 123-p. 126 p. 158-p. 163 p. 176-p. 177	新しい『幼稚園教育要領』『小学校学習指導要領』 に対応した教育理論と指導法を概説した。(全192ペ ージ) (編者) 生野金三、香田健治、湯川雅紀、高木史人 編。 (共同執筆者) 生野金三、香田健治、湯川雅紀、高 木史人、阿久根崇、伊藤利明、浦郷淳、小山内弘和 、小西正雄、生野桂子、高塚桂子、福山多江子、山 本真紀 (13名) (本人担当部分) 「第1章 初等教育の教育目的・目 標」「第2章 初等教育の教育内容1 幼稚園の教育内 容「言葉」」「同2 小学校の教育内容 国語科」「 第3章 初等教育の指導法2指導案の事例(2)絵本に興 味を持たせる「絵本の読み—聴き」」「同4 指導案 の事例 国語科」「補章2 中学校の教育内容 国語科 」「同3 小中連携を見据えた学習指導案 国語科」I ISBN978-4-907282-41-7
3. こえとことばの現在 口承文芸の 歩みと展望	共	2017年4月	三弥井書店 (本人担当部分) p. 184-p. 198	日本口承文芸学会創立40年を記念して、学会の研究 の到達点を示そうとした。ISBN978-4-8382-3320-5 (全335ページ) (編者) 日本口承文芸学会 (共同執筆者) 飯倉義之、石井正己、伊藤龍平、内 田伸子他 (33名) (本人担当部分) 「諺・謎・命名・歌の研究史概説 —子どもの「主体的・対話的で深い学び」につなげ る研究私史」
4. 「採集」という連携—結城次郎か ら昭和初期の昔話研究と隣接諸科 学との関係を問う	共	2016年12月3 日	関西福祉科学大学教育 学部 高木史人研究室 (本人担当部分) p. 4-p. 50	高木史人編著。結城次郎という忘れられた民俗学者 、昔話の採集者の事跡を追究していくと、結城が磯 貝勇と共に工業学校の教員であり、理系の出身であ ったこと、博物学会にも入るなど活躍していたこと をつきとめ、民俗学や昔話研究の初期の研究が、理 系の人びととも「採集」というキーワードを介して 繋がっていたことを分析した。 (全 119ページ) JSPS24520927研究報告書である。(本人担当部分)「 「採集」という連携」
5. ナイトメア叢書②幻想文学、近代 の魔界へ	共	2006年5月	青弓社 (本人担当部分) P. 96~P. 108 ただし往復書簡の体裁 なので、飯倉義之と半 分ずつの執筆となっ ており、厳密に頁を示 すのは不可能である。	口承文芸において、怪談と同様に笑話がマージナル な位置に置かれて、研究史上冷遇されてきた事情に ついて、飯倉義之と往復書簡の形での意見交換を行 なった。ISBN978-4-7872-9179-0 (全274頁) (編者) 一柳廣孝、吉田司雄 (共同執筆者) 一柳廣孝、東 雅夫、吉田司雄、真 杉秀樹、高原英理、遠藤徹、高山 宏、堤 邦彦、 高木史人、飯倉義之、光石亜由美、中沢弥、長山靖 生、横濱雄二、諸岡卓真、高橋 準、渡邊英理、久 米依子、西井弥生子 (19名) (本人担当部分) 「怪談と語りの近代」
6. 旧可児郡〈口承〉資料集	共	2006年3月	名古屋経済大学地域社 会研究会〈口承〉研究 班 (本人担当部分) p. 7-p. 11	平成の大合併により、1889年から合併を一切せず にきた岐阜県可児郡兼山町は可児市と合併すること になった。その町のようにすを名古屋経済大学地域社 会研究会〈口承〉研究班のメンバーと聞き書きしな がら纏めた〈口承〉資料集巻頭の解説。第二次世界大 戦で戦死した兼山町旧家出身の伊藤清司の遺稿集を 分析しながら、兼山町の地勢的位置づけとそれに伴 う〈口承〉のあり方を論じた。(全300頁) (共同執筆者) 高木史人・杉浦邦子・遠 志保・大 橋和華・藤久真菜・飯倉義之・高塚明恵・竹内邦孔 ・野村典彦 (9名) (本人担当部分) 総説「佛の、町の賑わい—旧可児郡 兼山町とその周辺の〈口承〉を聴いて—」
7. 「学校の怪談」はささやく	共	2005年9月	青弓社 (本人担当部分) P. 198-P. 246	「怪談」は口承文学で検討されることなく放置され ていた。ここでは柳田國男・折口信夫・今野円輔の 「怪談」についての解釈を整理した。また、「学校の 怪談」が怪異への興味本位で紹介されてきたこと を実証した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
8. 学生研究会による昔話研究の50年	共	2005年3月	國學院大学説話研究会 ・國學院大学民俗文学 研究会OB有志 (本人担当部分) P. 180-P. 223 P. 325-P. 348	その結果、現在の怪談理解が「怪」に偏り、「談」という「話し合う」技術への興味がおろそかになっていることを指摘して、今後は子どもたちが「話し合う」技術につなげる活用のしかたがあると仮説した。ISBN978-4-7872-9177-6 (全268頁) (編者) 一柳廣孝 (共同執筆者) 一柳廣孝、東 雅夫、吉田司雄、宮川健郎、難波博孝、戸塚ひろみ、山田巖子、野村典彦、高木史人 (9名) (本人担当部分) 「怪談の階段」
9. 名古屋経済大学経営学部創設記念論集	共	2003年3月	名古屋経済大学 (本人担当部分) P. 558-P. 584	従来、説話学的に論じられることのなかった「オトギリソウの話」を日本各地の類話を紹介し、また近世の文献所収の類話を紹介検討した。結果、単純な伝播論では論じられないのではないかとした。(全364頁) (共同執筆者) 飯倉義之、矢口貴子、田畑博子、坂口幸恵、内田みゆき、長野ふさ子、常光 徹、戸塚ひろみ、石黒順子、近藤雅尚、小堀光夫、菱川晶子、伊藤清和、山本則之、田中拓也、内藤浩誉、和久津安史、高塚さより、伊藤慎吾、伊藤龍平、根岸英之、高塚明恵、竹内邦孔、秋葉弘太郎、高木史人、新田寿弘、野村典彦、宮地武彦、倉田隆延、矢口裕康 (30名) (本人担当部分) 「昔話は世につれ、世は昔話につれ—学生研究会の昔話集・資料集小史、あるいは昔話集・資料集の社会史・その一—」 「オトギリソウの話」
10. 日本説話小事典	共	2002年4月	大修館書店 (本人担当部分) P. 305-P. 318	昔話は、語りという口承文芸の枠の中に閉じ込められた存在ではなかった。昔話をさまざまなメディア状況の中に配置しなおすことで、柳田國男の想定した昔話という問いが浮かび上がるのではないかと。ここでは、「昔話を読む」という日頃何気なく用いてしまう表現に拘り、そのいとなみの機能を探った。(全584頁) (共同執筆者) 伊藤俊雄、伊藤久司、伊藤幸男、荻田誠一、川岸 清、木全敬止、久保田安彦、佐藤敏明、辻本興慰、中西昌武、中村壽男、萩原俊彦、原田裕治、堀田誠三、丸山祐一、水田珠枝、縣 孝之、伊藤利明、大野 隆、近藤利恵、宮沢秀次、岸野三重子、高木史人 (23名) (本人担当部分) 「昔話を読むいとなみ—鶯声の昔話から—」
11. <口承>研究の地平	共	2001年6月	「口承」研究会 (本人担当部分) P. 70-P. 78	事典巻末の「いま、説話を考える」において、編者を代表して総説を論じた。従来の説話の定義を紹介した後、これからの説話研究は文字に書かれた説話であっても口伝の発想、すなわち音声言語や身ぶりなどの特質を擬似的に聴き取る読み方を意識する必要があると論じた。具体的には七巻本『沙石集』所収「姫君ノ事」から、かつてこの話には声色と身ぶりとが伴っていたはずだと仮説した。ISBN978-4-4690-127-05 (全339頁) (編者) 野村純一、藤島秀隆、三浦佑之、高木史人 (共同執筆者) 野村純一、藤島秀隆、三浦佑之、高木史人、石原千秋、上田 渡、江藤茂博、岡部隆志、小森陽一、東原伸明、吉田司雄他 (46名) (本人担当部分) 「いま、説話を考える」
12. テキストへの性愛術—物語分析の理論と実践	共	2000年4月	森話社 (本人担当部分) P. 265-P. 299	昔話が近代において、大きく成長したことを、昭和10年に出版された峯地光重著『聴方話方教授細目と教授資料』を引用して説明した。日本口承文芸学会大会シンポジウムのための小冊子の寄稿。 (共同執筆者) 佐藤健二、小池淳一、森 明子、助川幸逸郎、重信幸彦、山田巖子、矢野敬一、根岸英之、高木史人 (9名) (本人担当部分) 「昔話の近代」
				話型による物語の分析を実践した。具体的には話型をさまざまな水準から把握しようとした。「声の話型」として『平家物語』の「忠度都落」を、「名前の話型」として『源平盛衰記』の「西行出家譚」を、「場の話型」として『平家物語』冒頭の「祇園精舎」を、それぞれ多義的に読み込もうと試みた。ISBN4-916087-15-1 (編者) 安藤 徹、高木 信

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
13. 名古屋経済大学経済学部創立20周年記念論集	共	2000年3月	名古屋経済大学 (本人担当部分) P. 612-P. 632	(共同執筆者) 安藤 徹、金子明雄、高木 信、ツベタナ・クリステワ、藤森 清、松井健児、依田富子、助川幸逸郎、斉藤昭子、高木史人、立石和弘 (11名) (全347頁) (本人担当部分) 「悦ばしき話型」
14. 現代民俗学の視点 第3巻 民俗のことば	共	1998年10月	朝倉書店 (本人担当部分) P. 32-P. 58	柳田國男が試みた昔話研究は、本来「はなし」として捉えるべきものであったが、柳田以後それが「かたり」として研究されてきたことを分析し、そのために研究がスタティックになってしまったことを指摘した。さらに、そのような静かな昔話研究を活性化するためには「共＝競演」という視座が有効であると論じた。 (共同執筆者) 石田隆造、市川文三、伊藤俊雄、伊藤久司、荻田誠一、木村隆夫、坂本雅子、下村尚司、角谷登志雄、武井満男、中西昌武、野村重明、堀田誠三、松岡寛爾、丸山祐一、三浦 東、水田珠枝、宮崎 孝、縣 孝之、伊藤利明、大野 隆、岸野三恵子、近藤利恵、宮澤秀次、吉澤洋二、高木史人、山田英彦 (27名) (全658頁) (本人担当部分) 「「昔話」の解釈・再考」
15. 岩波講座日本文学史 第17巻 口承文学2・アイヌ文学	共	1997年3月	岩波書店 (本人担当部分) P. 1-P. 25	1920年代から1930年代における昔話の研究史の中で、「話型」の認識がどのように形成されていったのかを、バーン、佐々木喜善、柳田國男、関敏吾らの著作から検証した。特に柳田國男が小ざ子譚をどのように話型全体の見取り図の中に組み込んでいったのかを分析して、話型の認識という客観的な性格のものが、実は学界政治的な様相を帯びることを指摘した。話型の本質は政治なのである。ISBN978-4-254-5-0513-9 (全245頁) (編者) 関 一敏 (共同執筆者) 関 一敏、高木史人、益子待也、鈴木寛之、佐藤健二、小林康正、笹原亮二、牛島史彦、玉野井麻利子、田中丸勝彦、長志珠絵、高桑守史、坂内徳明 (13名) (本人担当部分) 「話型の認識—昔話研究の実践から」
16. 口承文学大概	共	1997年3月	おうふう (本人担当部分) P. 297-P. 334	「口承文学2」の総論。口承文学研究から音や声を捕捉する口承＝文学研究への転換の必要を説き、具体的には昔話の〈場〉と〈時〉とについて、語り手中心の昔話観から語り手と聴き手との間に生成する昔話観への転換を説いた。また、一義的な話型解釈から多義的な話型解釈への転換の必要も説き、口承＝文学研究の今後の課題についての展望を試みた。17巻「口承文学」を概説した。ISBN978-4-00-010687-0 (全405頁) (編集委員) 久保田淳、栗坪良樹、野山嘉正、日野龍夫、藤井貞和 (共同執筆者) 高木史人、丸山顕徳、野村敬子、重信幸彦、櫻井美紀、小池淳一、山田巖子、佐藤健二、中川 裕、志賀雪湖、奥田統己、蓮池悦子、葛野辰次郎、高橋規、小松哲郎、野本久栄、内田祐一、吉根憲一、川村シンリツ・エオリバック・アイヌ、本田優子、大谷洋一、丸山隆司 (22名) (本人担当部分) 「昔話の〈場〉と〈時〉」
17. フィールドワークを歩く—文科系研究者の知識と経験—	共	1996年6月	嵯峨野書院 (本人担当部分) P. 104-P. 114	民俗学が心意現象の解明を目的とするならば、そのための民俗学の文体とはどのような形が必要なのかを、民俗学者、国文学者の臼田甚五郎 (大正4年～平成18年) の「口承文学紀行」を分析しながら解説した。「口承文学紀行」は「論文」とも「紀行」とも異なる文体を志向しており、柳田國男の『海南小記』や『雪国の春』に連なる。論理と情緒との総合が「心意現象」を説くための文体だと指摘した。ISBN4-273-02944-8 (全337頁) (共同執筆者) 臼田甚五郎、高木史人 (2名) (本人担当部分) 「解説 歩みつつ思ひ思ひつつ歩むなり—「口承文学紀行」・その可能性と実践と—」
				口承文学のフィールドワークを行う場合、定まった聴き方、聞き書きの仕方、カードの書き方、纏め方があるのではないかと、という思い込みを自省して、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
18. 平家物語 研究と批評	共	1996年6月	有精堂 (本人担当部分) P. 163-P. 194	それぞれの方法がそれぞれに偏りを生むことを指摘し、なおその上でその偏りを自覚して方法を使うことの必要を説いた。最初に方法があるのではなく、ノートやテープレコーダーといった道具立てが方法を生む場合の多いことを指摘した。ISBN4-7823-0233-9 (全398頁) (編者) 須藤健一 (共同執筆者) 須藤健一、山中速人、鶴飼正樹、松田素二、永井良和、志水宏吉、石本清英、田口洋美、小林康正、笹原亮二、高木史人、重信幸彦、小池淳一、蛸島直、小川徹太郎、栗本英世、大塚和夫、杉本良男、山下晋司、上野弘子、江口信清、八杉佳穂、伊東一郎、大森康宏、佐藤浩司、田原広史、梶茂樹、堤邦彦、灘本昌久、片山剛、井野瀬久美恵、印藤道子、前山政毅、戸所隆、菊池俊夫、松原宏、水内俊雄、荒井良雄(38名) (本人担当部分)「<口承>として聴く一手作りの声拾いのために一」
19. 説話の講座・2・説話の言説一口承・書承・媒体	共	1991年9月	勉誠社出版 (本人担当部分) P. 67-P. 86	口承文芸は「口承」といいながらも文字にも記される「意味」を中心に研究されていき、音や声の根源を突き詰めることを怠ってきたと自省して、声や音をどのように捕捉するかという「口承=文学」の目的を提出した。東京都板橋区に伝わる二代目常陸大掾(若松若太夫)の演じる「小栗判官」を分析しながら声による「話型」の発見を行い、小栗判官に父と子との権力の交替を聴いた。ISBN4-640-31076-5 (全333頁) (編者) 山下宏明 (共同執筆者) 美濃部重克、高山利弘、刑部久、榊原千鶴、以倉紘平、阿部泰郎、石井正己、高木史人、マイケル・ワトソン、馬場光子、中島美幸、大津雄一、高木信、山下宏明(14名) (本人担当部分)「語りの『声』」
20. 天栄村史 第4巻 民俗編	共	1989年3月	福島県岩瀬郡天栄村(第一法規出版制作) (本人担当部分) P. 623-P. 788	柳田國男によって昔話や伝説の研究は始められたが、両者は同時に「発見」されたのではなかった。『遠野物語』では「伝説」の語はみえても、「昔話」の語はない。柳田にとって伝説や昔話はどのような意味があつて発見されていったのかを考察した。伝説は、原日本人山人説と係わりながら、山の伝説を多くみていったし、昔話は方言研究から始発していったのである。ISBN978-4-585-02002-8 (全338頁) (編者) 小峯和明 (共同執筆者) 小峯和明、藤井貞和、斎藤英喜、高木史人、石井正己、関根賢司、末次智、三浦佑之、長谷川政春、田口和夫、猿田知之、川端善明、菊地仁、関山和夫、五味文彦、山本節、三田明弘(17名) (本人担当部分)「昔話と伝説」
21. 民間説話の研究—日本と世界—関敬吾博士米寿記念論文集	共	1987年7月	同朋舎出版 (本人担当部分) P. 374-P. 394	福島県岩瀬郡天栄村において昔話・伝説・世間話がどのように伝えられていたのかを、自らのフィールドワークをもとに概説した。天栄村は東西に細長い村であるが、東の中通り地方に属する地域と西の会津に接した地方とでは、方言も含めて大きくその様相を異にする。が、双方ともいまだよい語り手が健在であり、彼らの昔話を語られた順に報告して、その前後の文脈を探った。(全853頁) (共同執筆者) 田中正能、古川明、鹿野正男、玉川寿一、田母野公彦、野沢謙治、高木史人、星ナツ、松崎栄子、星嘉右門衛門、松崎兵司、兼子隆雄、森忠一郎、水沼良夫(14名) (本人担当部分)第11章「民間説話」第1節「昔話・伝説・世間話とは何か」、第2節「昔話」
				日本の民間説話(民話)研究をリードした関敬吾(明治32年~平成2年)の研究について、関へのインタビューを重ねて、関の生い立ちとの関係から論じた。関は長崎県の島原半島の鯛漁の網元の出であり、朝鮮半島や中国に開かれた意識のもとに育った。柳田國男が兵庫県神崎郡福崎町という農村に育ったのに比べると、大きく異なり、その上に民話の「比較」という視点が形成されていった。ISBN4810405923 (全396頁) (共同執筆者) 大林太良、野村純一、小澤俊夫、荒木博之、宮田登、小松和彦、伊藤清司、山下欣一、川田順造、福

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
22. ストーリーテリング	共	1985年10月	弘文堂 (本人担当部分) P. 226-P. 247	田 晃、徳田和夫、岩瀬 博、崔 仁鶴、君島久子、井本英一、江口一久、高木史人 (17名) (本人担当部分) 「閑敬吾博士と民間説話研究—『源郷』との係わりから」 昔話が語り手だけによって語られるのではなく、聴き手によっても昔話が生成されることを、まず、昔話の相槌が語り手と聴き手との身分差、年齢差によって変わることを指摘し、聴き手の語る能力を示すために、「火廻し」という語り手が次々と交替していく語りの場についての報告を行った。子供が活躍する語りの場では「胡瓜と靴」のごとき簡単な昔話が生まれることも論じた。ISBN4-335-55022-7 (全288頁) (編者) 野村純一 (共同執筆者) 佐藤涼子、塚原 博、富田博之、金沢嘉市、小河内芳子、江森隆子、栗原秀雄、吉沢和夫、安里和子、百々佑利子、西岡直樹、飯豊道男、高木史人、野村純一、上地ちづ子 (15名) (本人担当部分) 「昔話の語り合い—『火回し』を中心として」
23. 日本昔話研究集成・第3巻・昔話と民俗	共	1984年8月	名著出版 (本人担当部分) P. 364-P. 389	福島県東白川郡鮫川村の水野芳光翁 (明治32年～平成2年) と彼の伝える100話の説話との関係を、ライフ・ヒストリーという視座から考察した。話数が多いにもかかわらず、語りの技術が欠けていることを、彼の長い村外の生活、特に福島県下で6人目という自動車運転免許を取得して運転手になった経緯とからめて考察した。近代の昔話の語り手を、素朴な伝承者のイメージだけではみられないのである。 (全437頁) (監修者) 閑敬吾、(編者) 野村純一 (共同執筆者) 野村純一、小島瓊禮、白田甚五郎、稲田浩二、松前健、真鍋昌弘、田中整一、横山登美子、鈴木正彦、石川純一郎、大森郁之助、神谷吉行、小松和彦、宮本常一、土橋里木、松谷みよ子、野村敬子、高木史人、岩瀬 博、松岡享子 (20名) (本人担当部分) 第3章 昔話の語り手 「昔話伝承者とその生活史—水野芳光翁」
24. 昔話の語り手	共	1983年12月	法政大学出版局 (本人担当部分) P. 108-P. 134	鳥取県八頭郡用瀬町に住む安東花媼 (明治32年～昭和58年) という伝承者についての報告と分析を試みた。安東媼は自分の伝える206話を「ハナシ」と認識している。だが、その中には「ムカシバナシ (昔話・伝説) / イマノコト (世間話)」「ムカシバナシ (昔話) / ホントウノハナシ (伝説・世間話)」という2通りの認識をしており、「カタリ」は所謂語り物を指すことが分かった。 (全254頁) (編者) 野村純一 (共同執筆者) 閑 敬吾、佐久間惇一、近藤雅尚、佐々木徳夫、山田八千代、高木史人、常光 徹、花部英雄、野村敬子、有馬英子、登山 修、野村純一 (12名) (本人担当部分) 「はなしの伝承意識と伝承機能—安東花」
2 学位論文				
1. 川観念の研究 (修士論文)	単	1983年3月	國學院大學大学院文学研究科日本文学専攻 主査 白田甚五郎、副査 牧田茂	400字詰原稿用紙110枚
2. 昔話伝承者の研究 (卒業論文)	単	1981年12月	國學院大學文学部提出 指導教員 野村純一	400字詰原稿用紙580枚。
3 学術論文				
1. 昔を「話す」か、「語る」か。—昔語りの「相槌」を通して子どもの「聴く」技術 (わざ) が養われる (招待)	単	2020年3月31日	山口大学人文学部異文化研究交流施設 『異文化研究』14号 p. 91-p. 110	現在では「昔話」の語はよく耳にするけれども、「昔語り」の語を耳にするのは珍しくなった。しかし、歴史的には「昔語り」の方が古くから存在し、また、つい最近まで各地に根強く伝わっていた。ここではなぜ「昔話」の語が主流になっていったのかを研究史から説明し、現在における「昔語り」再考の意義を論じた。
2. 母と息子との「民話」 (招待)	単	2020年3月31日	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』43号 p. 203-p. 214	閑敬吾の用いた「民話」の語が単なるfolktaleの翻訳語ではなく、閑の原郷である長崎県小浜町富津での言葉の使い方に起因していたことを説いた。「民話」と「昔話」との間には、これらを伝えるときの動詞「カタル」と「ハナス」との差異の問題があり、それが「ハナス」を言挙げする柳田國男と母・タダシから「カタリ」として伝え聴いていた閑敬吾

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
3. 「教職実践演習」の研究－教員養成を主たる目的とする学部学科における「教職実践演習」とカリキュラム全体との関係への試論－（査読付）	共	2020年3月31日	尚綱大学 『尚綱大学研究紀要』 第52号 p. 37-p. 60	との大きな相違点としてあったと論じた。 教職実践演習においては、個々の学生の学修到達度を踏まえた上で教育方法を多重に重ね合わせ、組み合わせを使用して使用するトライ・アンギュレーション（佐藤郁哉）、知の三角測量（川田順造）の視座が重要であり、その根底に、あえてアルカイックなプリコラージュ（C. レヴィー-ストロース）への理會を据えることが必要だとした。全7章。 （執筆）生野金三・高木史人・香田健治・湯川雅紀（本人担当部分）第1章、第2章、第4章、第5章、第7章の執筆を主に担当した。
4. 「社会的・共＝競演的でひろい悟り」へのアプローチ－小学校教育史、国語科教育史との係わりから－（招待）	単	2018年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』41号 p. 125-130	日本口承文芸学会第71回研究例会報告として執筆した。ここでは新たに、2006年改正教育基本法で新たに加えられたいわゆる教育目標「伝統文化」に係わる条文が戦時体制下に制定された1941年改正小学校令（いわゆる国民学校令）に酷似しており、それ以前に遡ることができないという意味で、非伝統的な戦時下の発想であることを追加して示した。
5. 『赤い鳥』童話と昔話伝承との共＝競演－「それから」「どのように」になったのか－（招待）	単	2018年11月	子どもの文化研究所 『子どもの文化』50巻1号 p. 56-p. 73	『赤い鳥』誌100年を記念した同誌の「光と影」特集号への寄稿。柳田國男が「童話」に対抗する形で「昔話」研究を始発したことから説き始め、記述する「童話」が「どのように」と細部を縁取るのに対して、口伝の「昔話」は「それから」とさらっとした語り口になることを紹介した。この両者の差異を宮尾晃一郎の童話と岩倉市郎探話の昔話とを比較して紹介した。また、童話と昔話とが混淆していくさまを波多野ヨスミの昔話等を分析し、最後に鈴木三重吉と磯貝勇との対面の意味を推理して、後の童話を批判して生れた児童文学の流れには、童話の昔話化という要素があるのではないかと推理した。
6. 昔話を語るといふこと — 幼児・児童に児童文化・伝統文化としての昔話を「語り-聴き」するための覚悟について、あるいは言葉と昔話との関係について—（査読付）	単	2015年3月	名古屋経済大学教育保育学研究会 『教育保育研究紀要』1号 P. 1～P. 13	伝統文化としての昔話についての基礎的知識を持つ小学校教員が少ないという現実を鑑み、その知識の概説を試みた。また、昔話を幼児や児童に語ることに注意点を述べた。昔話が「言葉」を覚えるための宝蔵であると柳田國男は説いたが、言葉を教えるには、言葉の性質を知る必要がある。言葉は、事柄を区別することにより意味を生成するが、区別の延長上に差別やいじめも引き起こす可能性があることを知悉した上で、児童文化・伝統文化の重要な一つとして昔話の「語り-聴き」を指導する必要があると論じた。
7. 幼稚園・保育所の言葉指導と小学校国語科指導とに必要な「昔話」の知識について — 特に児童文化論及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の視座から—（査読付）	単	2015年2月	名古屋経済大学人文科学研究会 『人文科学論集』94号 P. 1～P. 18	新しい小学校学習指導要領によって国語科に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新たに立てられ、小学校第1、第2学年において昔話教材が充実することになったが、ここにいう昔話とは何か、国語科用の教科図書の各社の指導用資料に当たってもはっきりしないため、小学校教員用に概説を試みた。と同時に、幼稚園教育要領、保育士保育指針において昔話の語が見られないが、幼稚園・保育所での言葉指導と小学校での国語教育との連携を探る上での昔話の有用性について考察した。結論としては、柳田國男が昭和初期に説いたように、「聴く」指導のために活用するのが有効ではないとした。
8. 考えるヒントとしての昭和初期－シンポジウムをふり返って－（招待）	単	2014年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』37号 P. 178～P. 182	平成25年6月2日に東京都江東区の深川江戸資料館で行なわれたシンポジウム（「口承文芸」「民俗」研究の可能性を問う－昭和初期からの照射－）についての機関誌への報告。研究が細分化されて初期のダイナミズムが失われてきた現在において、研究の初発に持っていた可能性を改めて考えることの重要性を指摘した。
9. 肖像と伝説 — 市橋鐸・林輝夫師弟における内藤丈艸像蒐集から（招待）	単	2013年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』36号 P. 41～P. 53	蕉門の四哲の一人とされた内藤丈艸は、愛知県犬山市の出身であった。犬山藩主・成瀬家の御典医だった鈴木玄道家の出身の鈴木鐸、後に市橋家に入り、筆名・市橋鐸といい、当地の昭和初期の郷土研究、あるいは文学研究を領導した。その研究の一つに、内藤丈艸研究があったが、その一つに内藤丈艸の像の蒐集があった。それは、やがて、旧制小牧中学の生徒だった林輝夫に引き継がれた。ここでは、丈艸の没後100年以上を経た肖像が、すでにイメージの集積を経て、伝説として捉えられることを指摘した。そうして、その肖像を見ると、謹厳な僧形、飄逸な世捨て人、穏やかな俳人と、像が一つの伝承像に定まっていなかった。その原因を、出家遁世した丈艸が、市井との交わりをしていなかったことに求めた。
10. 小学校国語・昔話教材の指導法へ 覚書－光村図書版『こくご 一上』所収「おむすび ころりん」	単	2013年11月	名古屋経済大学人文科学研究会 『人文科学論集』	平成20年の学習指導要領では国語で新たに「日本の伝統文化と国語の特質に関する事項」を指導することが求められるようになり、小学校1、2年では「昔

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
、同『こくご 一下』所収「まの いい りょうし」を素材にして —			92号 P.1～P.28	話・神話・伝承」教材が増えた。ここでは、光村図書 の国語教科書の昔話教材「おむすびころりん」「まの よいりょうし」を素材として、それらの教材が昔話研究 の蓄積を顧慮しないで、昔話の全体の構成をみずに主 題を求めたり（「おむすびころりん」）、世間話を昔話 だと説明したり（「まのよいりょうし」）していること を指摘して、教科書に収められている昔話教材が創ら れた伝統であることを解説し、その上で昔話教材を授 業するためには児童の住まう個々の地域の伝承例を蓄 積した上で指導することが必要だと指摘した。
11. 青空に似ている物語—『“文学少女” シリーズ』と『源氏物語』と —	単	2011年11月	名古屋経済大学人文科学 研究会 『人文科学論集』 88号 P.1～P.25	ライトノベルというジャンルについて概説をし、次 いで全16冊の販売部数で220万部を超すベストセラー の野村美月著『“文学少女”シリーズ』について、 分析をした。『“文学少女”シリーズ』に限らず、 ライトノベルには従来の教養小説・児童文学の要素 が色濃く、子どもから大人に成長していく過程を描 くスタイルが多いことを指摘した。その場合、成長 を端的に現すことばは柳田國男が使用する意味での 「同情」であり、人と情を同じくすることで成長と することを述べた。その上で、『“文学少女”シリ ーズ』には、「青空(ソラ)色や「すみれ色」など の色彩が人物描写に大きく係わっており、その意味 で『源氏物語』の「むらさきのゆかり」を連想させ るとした。
12. 方言研究と昔話研究—高田十郎の 場合— (査読付)	単	2010年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』 33号 P.25～P.38	大正から昭和初期に奈良高等師範学校で国語科教員 養成に携わった民俗学者・高田十郎(現・兵庫県相生 市出身)が、個人雑誌『なら』において、方言研究と 昔話研究とをどのように扱っていたかを論じた。方言 研究と昔話研究とが別個の存在ではなく、お互い に関わりをもっていたことと小学校教員が資料収集 に大きく係わっていたことを論じた。
13. 思想としての「昔話集」—フィー ルドと昔話伝承者像の構築過程に ついて—	単	2009年10月	名古屋経済大学人文科学 研究会 『人文科学論集』 84号 P.1～P.19	平成18年から平成19年にかけて刊行された2冊の昔話 集(野村純一編『定本関澤幸右衛門昔話集』、宮地 武彦著『蒲原タツエ姫の語る843話』)について、そ れぞれの昔話集の編集の方法を分析し、これらが伝 統的な「昔話の語り手」像を形成しようとしている ことを述べた。その上で、じつはこれらの語り手た ちも近代人としての生活があることを述べ、「昔話 の語り手」像や「フィールド」像の構築されるさま を分析した。
14. 噂と世間話と—世間話研究史の一 齣から— (査読付)	単	2007年5月	日本文学協会 『日本文学』 56巻5号 P.47～P.55	従来の民俗学が「世間話」と「噂」とを混同してい たのに対して、その学史的検討を試みた。柳田國男 はこの両者を区別して、共同体内の既知の話を「噂 」と見、話術の巧拙が重要なジャンルだとしている のに対して、共同体外からもたらされる未知の話を 「世間話」と見、話題のおもしろさが尊重されると していた。この視点は、古代文学の世語りなどを見 る上でも、一つのヒントを与え得る。
15. 「やろか水」伝説後日譚 —「や ろか雨」噂から「入鹿切」噂に至 るまでの輻輳を記録した市橋鐸と その生徒たち— (査読付)	単	2007年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』 30号 P.126～P.135	昭和5年に柳田國男が出した『日本昔話集(上)』掲 載の「やろか水」の話は、かつて市橋が『郷土研究 』誌上に報告した話をもとにしていることを紹介し た上で、そこで市橋が報告していた近隣の事例(「 入鹿切」)が柳田の手により削除されたこと論じた。 そのために市橋は彼が勤務していた旧制小牧中学校 の校友会雑誌を使って昭和6年に郷土研究特集号を編 み、「やろか雨」「入鹿切」の話を生徒に集めさせ て報告することになった。その教育方法は現在の総 合学習を彷彿させるが、集まった話は一樣ではなく 、輻輳する噂からひとつの伝説(歴史叙述)へと纏 められていったのではないかと仮説した。
16. 『旧可児郡(口承)資料集』につ いて—その研究史的位置づけと紹 介	単	2005年3月	名古屋経済大学地域社会 研究会 『地域社会』 52号 P.17～P.31	平成14、15、16年の夏に9名のメンバーと共同調査を 行なった岐阜県旧可児郡一帯の口承調査の報告と分 析。特に、従来の資料集との違いを「聴き手」への 注意にあるとした。
17. 昔話研究者と身体(招待)	単	2004年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』 27号 P.151～P.156	日本の昔話が研究される時、「研究者」や「フィー ルドワーカー」の身体がどのように扱われてきた のかを検討し、「昔話」や「常民」などということ ばと「研究者」の身体とがまったく係わりないこと はありえないと論じた。
18. カタリの会話、ハナシの会話—覚 書	単	2003年3月	名古屋経済大学人文科学 研究会 『人文科学論集』 71号 P.88～P.100	ハナシの技術とカタリの技術とでは会話の表現に差 異があることを、昔話の語り手と話し手との事例か ら分析した。「語り手」の場合は、一定の語り口 によって、ストーリーのなかに登場する人物の会話を3 人称的に叙述し、会話に接続しては「と」のよう に「と」のように会話を客体視するが、話し手の場合は

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
19. 民俗学者としての市橋鐸一尾北の伝説研究史から— (査読付)	単	2002年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』 25号 P. 47～P. 61	自分自身が会話主になりきっていて、「とといったげな」の部分が見つからない場合があると分析した。 愛知県犬山市出身の国文学者、市橋鐸(明治26年～昭和58年)の業績は、従来、近世俳諧、内藤丈草の研究者という付置にあったが、実は早くから柳田國男などと繋がりがあり、伝説研究を進めていたことを紹介し、市橋の忘れられた伝説研究の未発の可能性について、伝説の伝承者論として論じた。
20. <口承>研究といまこー「近代文学」としての「口承=文学」(招待)	単	2001年10月	日本近代文学会 『日本近代文学』 65集 P. 215～P. 221	「展望」欄。最近の口承研究が、近代文学の文化研究と近接していることを論じた。
21. <物語文学>と<口承>とのあいだを考える(招待)	単	2000年7月	学燈社 『国文学・解釈と教材の研究』 45巻9号臨時号 P. 16～P. 19	特集「テキストツアー源氏物語ファイル」の「ファイルをひらく」に置かれている。書かれた物語としての『源氏物語』と語られる物語としての<口承>との関係を、説教節の「日高川入会桜清姫御霊段」の分析から考察した。特に従来「自由間接言説」として、フランスの近代小説などと比較されていた源氏の言説をむしろ<口承>と繋がると主張した。
22. 研究者というメディア(査読付)	単	2000年3月	日本口承文芸学会刊 『口承文芸研究』 23号 P. 2～P. 17	この雑誌の特集「メディアの結節点としての<口承>」の一つとして、位置される。現在、口承文芸は近代化の中で衰退しているが、その事態と研究者とはどのように係わるべきか。ここでは、研究者自身が「メディア」として機能していることを自覚しつつ、その上で研究を批判的に継承していくことが、第一であると説いた。「遠野市物語」「ほんとうは残酷な昔話」「学校の怪談」などと研究者との関わりに言及した。
23. 温泉の民俗(招待)	単	1997年4月	おうふう 『悠久』 69号 P. 72～P. 80	「温泉」の民俗は、近代の文脈からも検討すべきことを述べ、横浜市金沢区ではかつて海水浴を「潮湯治」と呼んでいたことを紹介した。また、福島県下のある湯治場で年末年始の二週間を過ごしたところ、その宿が新・新宗教の支部で、癒しを求めて、人々が<口承>の場としての湯船につかることなどを述べた。夏目漱石の「こゝろ」における冒頭の海水浴も癒しの文脈から解釈できるとした。
24. 『昔話ノート』を読む—「手法」「道具立て」が対象を「発見」し「形作る」営みについて(査読付)	単	1996年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』 19号 P. 48～P. 63	新潟県長岡市を中心にして昔話を研究し続けた水沢謙一(明治43年～平成6年)の業績を評価する試みである。水沢の著述が昔話研究史の重要な資料であることを指摘して、特にフィールドワークにおいて用いた道具立て、たとえば聞き書きのノート、テープレコーダー、『日本昔話名彙』、『日本昔話大成』などの遷移がそのままに発見される昔話の語り手の性質と関係しあっていることを分析した。
25. 「昔話の語り手」の一九〇〇年—「数百話クラス」の語り手の誕生—(査読付)	単	1995年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』 18号 P. 53～P. 72	日本の昔話の語り手は数百話もの民間説話を伝えている。だが、そういう語り手たちは以前から変わらず居つづけたのであろうか。ここでは、昔話の話数を増やす契機として、1900年の改正小学校令で小学校に「国語科」が誕生し、「話シ方」教育が試みられた後に小学校で学んだ語り手を紹介・分析して、彼らの話数の増加が書くいとなみを心身に構造化していた事情が大きいのではないかと仮説した。
26. 集外の歌—「西行と女」の昔話(招待)	単	1994年7月	学燈社 『国文学・解釈と教材の研究』 39巻8号 P. 74～P. 82	「西行と女」の昔話を、従来の笑話という話型把握を離れて、「猿轡入」などの異類婚姻譚や、古代和歌における女歌の物語(鈴木日出男)の話型と重ね合わせることによって、「西行物語」などの書かれた文学と、現在の昔話との異同を探ろうと試みた。「西行物語」では古代和歌の女歌の物語のように、表面では女が拒むが実はそれが恋の成就を示していたが、「西行と女」の昔話では、表裏共に女の拒否に終わる。
27. 竹取物語から説話・昔話へ(招待)	単	1993年4月	学燈社 『国文学・解釈と教材の研究』 38巻4号 P. 95～P. 102	『竹取物語』を「アレゴリーの文学」と捉えるならば、『竹取物語』から説話・昔話へという歴史の設定は小公子譚ではなく、笑話の中に設定されてくることになる。ここでは『竹取物語』にみえる語源説話のフィクションが、漢字に二つの意味を当ててその落差を笑うことに注目して、日本の笑話の多くがこの流れを引くことを論じ、笑話の多くが書くいとなみを経て成り立っていると仮説した。
28. 「口承文芸」の<場>—義的な「話型」=「物語」から<場>=「物語」へ、そして多義的な「話型」へ・覚書(査読付)	単	1992年8月	日本文学協会 『日本文学』 41巻7号 P. 11～P. 21	昔話を今までのフィールドワークのように語り始めから語り収めまでで「一話」と区切って分節化するのではなく、語りの場全体で一つの物語として見た場合、そこにどのような主題が浮き上がってくるのかを分析した。三重県熊野市に住む「800話」を伝える伝承者のある日のフィールドワークの文脈を追っていくと、そこに「昔は良かった、今はだめだ」と

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
29. 村の語り—柳田國男の「昔話」論 小考（招待）	単	1992年10月	語り手たちの会 『語りの世界』 9号 P. 18～P. 25	柳田國男が昔話を研究した背後に方言研究や国語教育論のあることを論じ、特に柳田の「昔の国語教育」を読み解き、昔話を「ハナシ」の技法を子供に身につけさせるための手段として活用させる目的があったと論じた。思いどおりのことを相手に伝える技術としての「ハナシ」を重要視したのだが、そのためには「聴き方」が大切だと柳田は説く。この視座は、今日の昔話研究では失われたものであった。
30. 近代文学研究と現代文教育（招待）	単	1991年1月	國學院大学 『國學院雑誌』 92巻1号 (通巻1006号) P. 577～P. 597	高校の国語教育に携わる中で、生徒の持つ素朴な疑問、「筆者は本当にそう考えて、この文を書いたのか」について、いわゆるテキスト分析の考え方から答えた啓蒙的な文章。夏目漱石の「こゝろ」や芥川龍之介の「羅生門」をどのようによむのかについて、テキスト解釈は書き手の側にだけあるのではなく、読み手の側にも開かれていることを論じた。これは昔話の聴き手への注意と軌を一にする。
31. 「昔話伝承の研究」という物語— 昔話の伝承動態・α（招待）	単	1990年7月	砂子屋書房 『物語』 1号 P. 125～P. 140	昔話の伝承形態の図式を根拠から読み直すとするのかを、野村純一『昔話伝承の研究』に引かれている事例から実践した。たとえば京都府下での「昔話の語り合い」の事例を「本来は荘重な」存在と考え、大人同士での信仰儀礼であったらうと見做す解釈などは、全国的な事例の比較からしてそうはならないことなどを分析した。昔話の社会的機能に加えて、美的機能をも考慮すべきであると説いた。
32. 昔話伝承研究の課題—昔話の伝承 動態・γ—（査読付）	単	1990年6月	日本昔話学会 『昔話—研究と資料—』 18号 P. 102～P. 125	鳥取県の安東花燼の話す「食わず女房」を三回、時期を隔てて聴いたものがどのように変化しているのかを考察した。その時々々の雰囲気、聴き手からの発話などによって話は一回ごとに変化をみせる。伝承は固定されているような印象を与えるけれど、実は創造と表裏をなすもので、伝承と創造とは対立する概念ではない。また、昔話の研究にも文学のテキスト分析と同様な視座は有効だと論じた。
33. 身体に刻みこみ=刻みこまれる昔 話（一）（招待）・身体に刻み こみ=刻みこまれる昔話（二）	単	1988年5月（ 二）1988年8 月	（一）語り手たちの会 『語りの世界』 7号 P. 24～P. 31 （二）昔話伝説研究会 『昔話伝説研究』 14号 P. 68～P. 72	昔話を認識するいとなみがどのような機制によるのかを考察した。昔話は音声によって発せられるとはいっても、聴覚だけで認識するのではない。身ぶりという要素は視覚に訴えるものである。昔話の認識は様々な感覚器官を総合的に働かせて認識されるものではないのか。このような共通感覚的統合の上に昔話の認識・記憶があることを、福島県岩瀬郡天栄村の星網江女の昔話から考えた。
34. 一人一人の昔話（招待）	単	1988年11月	語り手たちの会 『語りの世界』 8号 P. 52～P. 59	福島県石川郡のある語り手が、自殺する一週間前に、いわば遺言として筆者に伝えた昔話（「夢見小僧」）を足掛かりにして、昔話を伝えることの、語り手の意識について考察をした。昔話に自分の幼時の人生を投影して語り、そこに後に生きるわれわれへのメッセージを籠めるという方法は、沖繩や奄美などの南島では慣用句として伝えられていたが、本州にも同様の機制があることを考察した。
35. 昔話の伝承動態・β—昔話の伝承 形態・伝承機能モデルを越えて— （招待）	単	1988年10月	長野県民俗の会 『長野県民俗の会会報』 12号 P. 1～P. 14	昔話の伝承形態という、昔話の語り手を中心として、社会構造機能主義的に捉えられた昔話伝承のモデルを批判的に再構築した昔話の伝承動態のモデルに置き換えることを主張した。昔話の伝承動態を語り手中心の視点から聴き手をも含めた視点へと転回し、昔話の伝承を動かない静的な見方から一回ごとに現れる動的なものへと捉え返すことによって、昔話の研究の閉塞状況を打破できる可能性を指摘した。
36. 昔話・歌・世間話—山形県の昔話 の世界の印象—（招待）	単	1987年7月	山形民話の会 『山形の民話』 100号 P. 33～P. 44	山形県西村山郡西川町大井沢に伝わる昔話の語り収め「どんびんさんすけさいざぶろう～」が、実際に大井沢にある屋号「さいざぶろう」を含んでおり、語り収めに世間話が撰取されていることを指摘した。また、大井沢の昔話に多く歌う要素があることをも指摘した。大井沢の口承文芸のジャンル観は、語りを中心にして世間話や歌などのジャンルをも含むものとして、他県の例と比較した。
37. 昔話と“身ぶり”（査読付）	単	1987年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』 10号 P. 58～P. 70	昔話は音声言語で語られるだけではなく、身体表現を通して語られる。福島県岩瀬郡天栄村に伝えられた「焼餅和尚」の昔話に伴う身ぶりに注目して、そこには必ず身ぶりが伴われること、語り口が省略されても身ぶりがしっかりしていれば話として十分に面白いこと、一つの身ぶりに二つの意味を持たせて笑いを誘うこと、などを分析した。昔話を読んで研究することの限界を指摘した。
38. 「昔話の聴き手」と昔話の語り合 い—その整理と分析及び話柄・新	単	1985年3月	國學院大学大学院文学 研究科学生会	昔話の伝えられる場として、従来考察されることになかった「昔話の語り合い」に注目して、事例を紹介

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
しい昔話について—			『國學院大学大学院文学研究科論集』 12号 P. 11～P. 33	介、分析した。そこでは大人も加わっている場合、子供だけの場合、また火廻し等の作法を伴う場合、伴わない場合、学校で行う場合など、多くのヴァリエーションがあるが、特に普段は聴き手でしかない子供の活躍に注目して、彼らが新しい話を積極的に取り入れることを具体例から跡づけた。
39. 民間説話の伝承意識小考—「語る」と「話す」について— (招待)	単	1985年10月	民話と文学の会 『民話と文学』 15号 P. 22～P. 26	鳥取県、岐阜県、千葉県、福島県、山形県のそれぞれのフィールドから、土地ごとに「語る」と「話す」とがどのように認識されているのかを、紹介した。「語る」と「話す」とは、それぞれの地域でそれぞれの文脈をもちながら、その違いについて認識されており、辞書的な一通りの説明では片づけられないことを説き、詳細な意識を探ることが、口承文芸のジャンル意識を知る上で重要である。
40. <伝承者>観から<伝承者>論へ—その軌跡と試論—	単	1985年1月	昔話伝説研究会 昔話伝説研究 (11) p. 34 - p. 44	かつて早川孝太郎は、村内に生活する全ての人を「伝承保有者」としながらも、その中を民俗採集の都合によって分類している。これは後の民俗採集に都合のよい人を「伝承者」と呼び、それ以外を「話者」と呼んだ『民俗学辞典』(東京堂)よりも示唆に富むとはいえ、フィールドワーカーの都合からの「伝承者」観であった。しかし、現在求められているのは「伝承者」論なのだと言った。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 招待講演「「素話」と「昔話」とはどう違うか?」	単	2019年8月18日	第82回国語教育全国大会 幼稚園・保育所部会 講演 日本国語教育学会 (於・筑波大学付属小学校)	幼稚園や保育所で行われている「素話」と口承文芸の「昔話」との違いを「聴き方」という観点から捉え、「相槌」を打ちながら聴く昔話を聴く姿勢の積極性に言及した。そうして、「昔話」は子どもが初めて接する「二次的ことば」(岡本夏木)に当たり、幼児期に昔話を純分に聴くことが、小一プロブレム(聴くことができない)への対策となることを述べた。
2. 招待講演「昔を「話す」か、「語る」か。—「聴く」姿勢を育てる幼小接続教育の試み—	単	2019年11月27日	第36回山口大学異文化交流研究施設公開講演会 (於・山口大学異文化交流研究施設)	学術論文1にて活字報告した。
3. シンポジウム「現在の学校教育における「伝統文化」教育の位相を問う—教科書教材・授業実践の事例などを通して—	共	2016年12月3日	日本口承文芸学会第71回研究例会 (於・関西福祉科学大学)	小学校において行われている「伝統文化」を扱った教材の問題点を検討した。 (共同発表) (パネリスト) 高木史人、立石展大、久保華誉、伊藤利明、矢野敬一、 (コメンテーター) 葛尾和宏、生野金三 (司会) 高木史人
4. 招待講演「声の物語、体の物語」	単	2013年6月	京都大学人文科学研究所講演会 (於・京都大学法経5号館)	口承文芸という研究領域のいまこの可能性を、具体的に説いた。東京都板橋区を中心に活動していた二代目若松若夫(二代目武蔵大掾)の説経節「小栗判官一代記親子対面矢取りの段」の録音から、声による権力の交代が描かれていることを論じた。併せて、京都大学の学生に京都の中世の伝承物語に対する注意を喚起した。京都大学の学部学生向け講演である。
5. シンポジウム「「口承文芸」「民俗」研究の可能性を問う—昭和初期からの照射—	共	2013年6月	第37回日本口承文芸学会大会 (於・江東区森下文化センター)	昭和初期の文脈に置いて、口承文芸や民俗学の始発の環境がどのように作用していたかを考えてみた。高木は、岩手県盛岡市にあって、謄写版の個人雑誌『方言と土俗』を刊行した橋正一を素材にして、民俗学もエロ・グロ・ナンセンスと深く拘っていたこと。そうして、謄写版の個人雑誌が、書き手と読み手とを交通させる機能を果たしていたこと、それが今日の大学中心の研究からの脱構築の大きなヒントになると説いた。 (パネリスト) 高木史人・菊池暁・土居浩・真鍋昌賢 (コメンテーター) 川村邦光 (司会) 高木史人
6. 招待講演「肖像と伝説—市橋鐸・林輝夫師弟の内藤丈艸像蒐集から—	単	2012年6月	第36回日本口承文芸学会大会 (於・犬山市福祉会館)	学術論文7にて活字報告した。
7. 招待講演及びシンポジウム「昔話の立ち上がるとき」	単	2011年10月	大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」 (於・大阪大学待兼山会館)	「昔話の立ち上がるとき」と題して、昔話研究黎明期が、方言研究の中興期と重なることを昭和初期の國學院大学方言研究会の活動を中心に紹介した。講演後、共同討議が行われた。 (講演) 高木史人 (コメンテーター) 真鍋昌賢 (司会) 山口良太、三浦詩織
8. シンポジウム「口承文芸研究のこれから」	共	2006年6月	第30回日本口承文芸学会30周年記念大会	日本口承文芸学会は昭和52年に設立され、ここに30周年を迎えた。この間、学会は発展を続けてきたが

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
9. シンポジウム「昔話を聴き続けて —「昔話採集家」・佐々木徳夫氏 の半世紀から—	共	2006年3月	(於・白百合女子大学) 日本口承文芸学会研究 例会 (於・千葉大学)	たとえば故大林太良は「亡びゆく口承文芸」とい うことばで口承文芸の時代が終わってしまったと唱 えた。このような経緯を経て、われわれの研究はど こへ向かおうとするのかを、ベテラン研究者・中堅 研究者・新進研究者をパネリストとして討論した。 当学会会長の荻原真子と共同で司会を務めた。 (パネリスト) 野村純一・酒井正子・真鍋昌賢 (司会) 荻原真子・高木史人
10. セッション「加工文化としてのく 口承」	共	2005年11月	社会思想史学会秋季大 会 (於・岡山大学)	昭和32年から宮城県を中心とする東北地方で昔話の 「採集」を始めて、現在までに1万話以上の昔話を聴 き取った佐々木徳夫氏からのインタビューを行い、 氏の聴き取るための身体技法や採集の方法史を明ら かにしようとした。 (昔話採集者) 佐々木徳夫 (パネリスト) 飯倉義之・川島秀一 (コメンテーター) 野村純一・根岸英之 (司会進行) 高木史人
11. シンポジウム「身体という場所」	共	2003年3月	日本口承文芸学会例会 (於・國學院大学)	口承文芸のフィールドワークから得られる資料には 、フィールドワーク時のフィールドワーカーの身体 の存在が刻印されていることを説いた。 (パネリスト) 姜竣、齋藤英喜、高木史人、野村典 彦 (司会) 兵藤裕己
12. シンポジウム「口承文芸と学校教 育」	共	2003年12月	日本口承文芸学会研究 例会 (於・市川市生涯 学習センター)	学術論文16にて活字報告した。 日本の昔話の最盛期が20世紀であることを述べ、そ の原因を小学校での国語科成立後の「話シ方」教育 の場にあったと説いた。 (パネリスト) 高木史人、米屋陽一、櫻井美紀 (司会) 根岸英之
13. シンポジウム「語りの〈場〉」	共	1991年6月	日本文学協会春季研究 発表大会 (於・大東文 化大学)	一般には、語りの場の中に用意された話型が披露さ れると考えられがちだが、実は、場じたいが新しい 話型を形作っていくことを論じた。 (パネリスト) 末次智、高木史人、橋本裕之、森正 人 (司会) 齋藤英喜、兵藤裕己
14. シンポジウム「伝承の認識」	共	1991年10月	日本民俗学会年会 (於・國學院大学)	学術論文27にて活字報告した。 柳田國男が「伝承」「伝統」の二語の意味を使い分 けていたことを分析して、「伝承」の語は「伝統」 に較べて価値をフラットにする機能があると述べた 。その上で、「伝承」を動態として把握するべきだ と論じた。 (パネリスト) 小島博巳、高木史人、野本寛一 (コメンテーター) 川田順造、平山和彦 (司会) 宮本袈裟雄、小川直之
15. シンポジウム「昔話の時空—昔話 研究の課題」	共	1989年7月	第3回日本昔話学会大会 (於・立命館大学)	従来、昔話の語り口は形式が括弧としてあり変わ らないと考えてきたが、詳細に検討すると決してそ うとは限らないと実例を挙げて説いた。 (パネリスト) 高木史人、松本孝三、百田弥恵子 (司会) 常光徹、丸山顕徳
16. シンポジウム「うたとかたり」	共	1988年6月	第12回日本口承文芸学 会大会 (於・島根大学)	学術論文31にて活字報告した。 歌と語りとをどのように解釈するかについての共同 討議。高木は、「歌ふ」「語る」の語原をそれぞれ 相手に衝撃を与える「搗つ」「打つ」に求める白田 甚五郎説について、これを歴史の実態とみるべきで はなく、非歴史的にモデルとして読み替えるべきだ と論じた。学術論文31にて活字報告した。 (パネリスト) 卜田隆嗣、高木史人、藤井貞和 (司会) 川田順造
17. 招待講演「昔話の伝承動態」	単	1988年11月	長野県民俗の会研究例 会 (於・長野県松本市縣の 森文化会館)	学術論文33にて活字報告した。
2. 学会発表				
1. 「教職実践演習」の実践と課題	共	2016年10月	日本教材学会第28回研 究発表大会 (於・盛岡大 学)	教員養成課程において、新たに導入された「教職実 践演習」について、文部科学省が求めている教育内 容と、各大学で行われている教育実践とがどのよう な関係にあるのかをアンケートなどの手法を用いて 分析すると共に、望ましい演習の実践への課題群を 検討した。(生野金三、香田健治、高木史人、湯川雅

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
2. 「むかしばなしがいっぱい」かー〔伝統的な言語文化と日本語の特質に関する事項〕における昔話教材の指導法に向けてー	単	2014年7月	第34回日本文学協会研究発表大会国語教育学会(於・いわき明星大学)	紀の共同発表) 光村図書版の小学校一年生用国語教科書に収められた「むかしばなしがいっぱい」か」という教材の検討をすると、日本の昔話教材が昔話・伝説・世間話を区別せず一括していること、話型的に大きく偏っていることが分かる。また、外国の昔話では西欧のメルヘン紹介に大きく偏り、伝承の昔話だけではなく創作文学も昔話に含ませるなど、とうてい伝統文化とはいえないことを説いた。その上で、小学校教員はこれらの偏りを承知した上で、教材を活用する必要があると論じた。
3. 方言研究と昔話研究	単	2007年6月	第31回日本口承文芸学会大会(於・奈良教育大学)	昭和初期の昔話研究が方言研究と混淆しながら出立したことを、岩手県の橘正一、広島県の結城次郎、東京の國學院大学方言研究会の学生たち、という三つの事例から論じた。
4. 民俗学者としての市橋鐸	単	2000年6月	第23回日本口承文芸学会大会(於・名古屋経済大学)	学術論文17として活字報告した。
5. 昔話・歌・世間話ー山形県の昔話の特色ー	単	1987年7月	第1回日本昔話学会大会(於・東京都立大学)	学術論文34として活字報告した。
6. 昔話と身ぶり	単	1986年6月	第10回日本口承文芸学会大会(於・遠野市民センター)	学術論文35として活字報告した。
7. 雁取翁の一考察	単	1983年6月	第6回日本口承文芸学会大会(於・早稲田大学)	東北地方や山陰、九州地方に分布する雁取翁譚は、花咲翁のサブタイプとされているが、そこに見える狩猟の要素や犬の活躍などから、アイヌの昔話パナンベ・ペナンベ・ウェベケレとの相同性が指摘できる。また、犬の出現が小き子譚の様相を示しながらも、単に川上から流れてくるのではなく、一旦逆流することから東アジアに広がる丹塗矢説話との類似が指摘できるとした。
8. 昔話伝承者とその生活史	単	1982年10月	昭和57年度日本民俗学会年会(於・遠野市博物館)	著書23として活字報告した。
9. 昔話伝承者の研究	単	1981年3月	日本民俗学会3月談話会 日本民俗学会 於・成城大学	昔話の伝承者にもいくつかのタイプがある事を述べ、村落に機能する者、家に機能する者などを指摘した上で、個人的な興味で伝承を保持している者が今は主流になりつつあることを述べた。
3. 総説				
1. 旧可児郡〈口承文芸〉	共	2006年3月	名古屋経済大学地域社会研究会 p. 7-p. 11	「佛の、町の賑わいー旧可児郡兼山町とその周辺の〈口承〉を聴いてー」 著書6に同じ。
2. 日本説話小事典	共	2002年4月	大修館書店 P. 305~P. 318	「いま、説話を考える」 著書10に同じ。
3. 日本文学史 第17巻 口承文学2・アイヌ文学	共	1997年3月	岩波書店 p. 1-p. 25	「昔話の〈場〉と〈時〉」 著書15に同じ。
4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 書評「真鍋昌賢『浪花節 流動する語り芸』せりか書房」	単	2017年5月	図書新聞3304号	
2. 昔話資料翻刻「結城次郎「肥前国北高来郡昔話」」	共	2016年12月	関西福祉科学大学 日本口承文芸学会第71回研究例会実行委員会 『「採集」という連携 結城次郎から昭和初期の昔話研究と隣接諸科学との関係を問う』 掲載頁 p. 51~p. 90 藤久真菜、高木史人(藤久真菜との共同翻刻につき、分担区分不可)	
3. 紹介「國學院大學方言研究会『方言誌』第一輯～第二三輯の目次及び概要」	単	2016年12月	関西福祉科学大学 日本口承文芸学会第71回研究例会実行委員会 『「採集」という連携 結城次郎から昭和初期の昔話研究と隣接諸科学との関係を問う』 p. 91~p. 116	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
4. 民俗学事典	共	2014年12月	丸善出版 P. 612～P. 613 P. 614～P. 615	民俗学が現在抱える問題群を解説する事典。見開き2ページでコンパクトに解説し、引く事典よりも読む事典を目指した。ISBN978-4-621-08773-2 (全811頁) (編者) 民俗学事典編集委員会 (編集委員長) 常光徹 (編集幹事) 板橋文夫、小池淳一、徳丸亜木、安室知 (編集委員) 飯倉義之、池田哲夫、篠原徹、長沢利明、俵木悟、松田睦彦、宮内貴久、八木透、山田巖子、山田慎也、山本志乃 (共同執筆) 上記及び高木史人他206名 (本人担当部分) 第6章「声とことば」(編集担当・山田巖子)全20項目の内「昔話と身体」「話型の展開
5. 書評「民俗学と文学や国語教育との幸せな交通のための覚書—小川の里程標—」	単	2007年4月	日本文学協会 『日本文学』 56巻4号 P. 66～P. 70	小川徹太郎『越境と抵抗—海のフィールドワーク再考』の書評を試みた。小川の方法は、漁民の使うことばに拘り、そのことばのもたらす身体性やコンテクストに徹底的にこだわることにある。それは、ことばの漁師としての小川の可能性をあぶりだすと共に、ことばをきっかけにして文学研究や国語教育研究にも係わる問題を提起するとした。
6. 三〇年前のぼくから三〇年後のあなたへ	単	2007年3月31日	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』30号 p. 200-p. 201	日本口承文芸学会第30回大会シンポジウム「口承文芸研究のこれから」おシンポジウム報告の冒頭に、当シンポジウムを企画・司会した立場からのコメント。
7. 書評「田中瑩一著『口承文芸の表現研究 昔話と田植歌』」	単	2007年3月	日本口承文芸学会 『口承文芸研究』30号 P. 253～P. 258	長く島根大学を拠点に、島根県下の口承文芸を研究してきた田中の業績を集大成した本書の特色を分析した。田中の研究は田植歌が先行し、そこで培った詞章の表現分析の手法が昔話にも援用されたが、昔話の散文においては、それ以外に構造分析の手法も導入された。だが、後者は十分な成果を挙げたとはいえず、田中の研究の大きな魅力は前者に顕著だとした。
8. 『学生研究会による昔話研究の50年』	共	2005年3月	國學院大学説話研究会 ・國學院大学民俗文学研究会0B有志 P. 235～P. 294	福島県東白川郡鮫川村大塩の水野芳光翁が残した106話の説話の内97話を翻字、紹介し、合わせて解説を付した。 (全364頁) (共同執筆者) 飯倉義之、高木史人他30名(著書8に同じ) (本人担当部分) 「水野芳光翁のざつとばなし」
9. 市橋鐸編著・稿本『丈艸書翰集』の翻刻・紹介(二)	単	2004年3月31日	名古屋経済大人文科学研究会 『人文科学論集』第73号 p. 一-p. 八 (p. 56-p. 49)	
10. 市橋鐸編著・稿本『丈艸書翰集』の翻刻・紹介(一)	単	2003年7月25日	名古屋経済大人文科学研究会 『人文科学論集』第72号 p. 一-p. 一三(p. 78-p. 66)	
11. 日本説話小事典	共	2002年4月	大修館書店 単独 P. 71～72;P. 162～164; P. 164～166;P. 208～210; P. 224～225;P. 269～270; P. 270～271、 東原伸明との共著 P. 301～303。	日本の説話を文字に書かれた文学作品から口伝えの口承文芸まで網羅して紹介しようとする試み。読む事典を目指した。 (全339頁) (編者) 野村純一、藤島秀隆、三浦佑之、高木史人 (共同執筆者) 野村純一、藤島秀隆、三浦佑之、高木史人、石原千秋、上田渡、江藤茂博、岡部隆、小森陽一、東原伸明、吉田司雄他(46名) (本人担当部分) 「聞き書き」P. 71～72; 「世間話」P. 162～164; 「説話と近代文学」P. 164～166; 「遠野物語」P. 208～210; 「蠅」P. 224～225; 「民間説話」P. 269～270; 「民話運動」P. 270～271、及び高木史人・東原伸明の共著で「話型」P. 301～303。
12. 事典 哲学の木	共	2002年3月	講談社 P. 787～P. 789;P. 898～P. 900	哲学のいまここのありようを平易に、しかし、存分に伝えようとする試み。引くと共に読む事典を標榜した。ISBN4-06-211080-6 (全1060頁) (共編) 永井均、中島義道、小林康夫、河本英夫、大澤真幸、山本ひろ子、中島隆博 (共同執筆者) 永井均、中島義道、小林康夫、河本英夫、大澤真幸、山本ひろ子、中島隆博、橋爪大三郎、三島憲一、鷺田清一、高木史人他(196名) (本人担当部分) 「話す」P. 787～P. 789;

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
13. 書評「武田正著『昔話の伝承世界—その歴史的展開と伝播』」	単	1997年2月	日本民俗学会 『日本民俗学』209号 P. 132～P. 141	山形県下で昔話の蒐集と研究を進めた武田の著作を分析して、その手堅い論述の背後に、聴き手への興味があることを述べた。
14. ガイドブック日本の民話	共	1991年11月	講談社 P. 79; P. 91～92; P. 102～103; P. 107～108 ; P. 111～112; P. 205～206 ; P. 239～240; P. 267～268; P. 272～274。	日本民話の会が企画した読む事典。9項目を執筆した。ISBN4-06-204595-8 (全475頁) (編者) 日本民話の会 (共同執筆者) 石井正己、川田順造、小池淳一、高木史人、武田正、中川裕、野村純一、益田勝実、松谷みよ子、吉沢和夫他(42名) (本人担当部分) 「片目の魚」P. 79; 「金鶏伝説」P. 91～92; 「小鳥前生譚」P. 102～103; 「湖山長者」P. 107～108; 「鯉の大助」P. 111～112; 「百合若大臣」P. 205～206; 「鮭」P. 239～240; 「塞の神」P. 267～268; 「田の神と山の神」P. 272～274。 一本書はその後平成14年に改名して、文庫本として復刊された。(日本民話の会(編)、決定版 日本の民話事典、講談社α文庫)
15. 物語会議—語りと物語事典	共	1990年1月	学燈社 『国文学・解釈と教材の研究』 35巻1号 P. 86～P. 132	雑誌上の事典企画。鎖連歌のように、前後に関連のある100項目を配して読む事典を目指した。 (編者) 藤井貞和 (共同執筆者) 石井正己、小峯和明、高木史人、藤井貞和、森正人(5名) (本人担当部分) 「始祖伝承」P. 90; 「歴史」P. 91; 「伝説」P. 92～93; 「昔語り」P. 101～102; 「世間話」P. 121; 「学校の話」P. 121; 「笑話」P. 122; 「色話」P. 122; 「民話」P. 122～123; 「落語」P. 123～124; 「昔話」P. 125; 「昔話の相槌」P. 125～126; 「最初に語る昔話」P. 126; 「昔話の語り合い」P. 127～128; 「話型」P. 128; 「モノローグ・ディアローグ・シンローグ・ポリローグ」P. 128; 「構造とゆらぎ」P. 129; 「昔話の語り手」P. 129; 「昔話の聴き手」P. 129～130; 「聞き書き」P. 130; 「身ぶり」P. 130; 「最後に語る昔話」P. 132。
16. ミステリー日本史 不思議な国ニッポン	共	1989年8月6日	新人物往来社 『歴史読本スペシャル・特別増刊'89-8』第34巻第14号 p. 100-p. 104; p. 108-p. 111	「物語のゆらぎの中を華麗に舞う静御前の舞衣」、「産湯から死に水まで、和泉式部の水への執着」部分担当。伝説論。
17. 書評「佐久間惇一編『波多野ヨスミ女昔話集』」	単	1988年5月	國學院大学 『國學院雑誌』89巻5号 P. 72～P. 87	新潟県新発田市の波多野ヨスミ女が語った619話の昔話・伝説・世間話をもとにして、波多野ヨスミ女の語りの世界の近代性を論じた。これらの説話を分析すると、差別的言辭、性的表現を忌避して、説話の近代化を図っていると説いた。
18. 書評「乾克己・小池正胤・志村有弘・高橋貢・鳥越文蔵共編『日本伝奇伝説大事典』—口承文芸のジャンルからのささやかな感想—」	単	1987年7月	昔話伝説研究会 『昔話伝説研究』 13号 P. 126～P. 130	『日本伝奇伝説大事典』の書名に見える「伝奇」と「伝説」との語の相違について考察し、伝説は従来から民俗学が対象としてきた村落社会に伝えられてきた主観的歴史を指すのに対して、「伝奇」を都市社会に生まれ出た噂や流言の類を指す語に相当するのではないかと説き、後者に新しい口承文芸の領域の発生を見られるのではないかと説いた。
19. 昔話伝説小事典	共	1987年11月	みずうみ書房 P. 25; 26; 30; 42; 44; 47; 66; 51; 59; 76; 85 ; 118; 122; 133; 139; 145; 147; 147; 152 ; 167; 169; 170; 172; 173; 190; 192; 194 ; 197; 201; 205; 218; 219; 233; 237; 238 ; 239; 240; 241; 244; 245; 245; 246; 247 ; 248; 249; 260。	500項目の内、47項目を執筆した。(全305頁)(共編) 野村純一、佐藤涼子、大島広志、常光徹(共同執筆者) 高木史人他(30名)。 (本人担当部分) アイヌの伝説; アイヌの昔話; 油取り; 色話; 上田敏4; 姥皮; 折口信夫; 浦島太郎; 小栗判官; 語りと伝承の場; 聴耳; 最後に語る昔話; 佐治谷話; 児童文学の口承化; 菅江真澄; 世間話の機能; 世間話の伝承; 説教師; 高木敏雄; 手なし娘; 伝説; 伝説の管理者; 伝説の調査; 伝説の伝承; 日本昔話大成; 糠福米福; 鼠経; 灰坊; 話し手; 常陸坊海尊; 継子譚; 水争いの話; 昔話と伽; 昔話の語り手; 昔話の語り手論; 昔話の機能; 昔話の享受; 昔話の構造; 昔話の資料集; 昔話のタイプインデックス; 昔話の調査法; 昔話の伝承経路; 昔話の表現; 昔話の分類; 昔話のモチーフ; ユーカラ
20. 書評 宮地武彦著『肥前伊万里の昔話と伝説』	単	1987年10月1日	國學院大學國語國文學會 『國學院大學國語國文學會通信』第26号 p. 12-p. 15	
21. 頼朝挙兵! 源氏の逆襲	共	1986年4月10日	新人物往来社 『歴史読本』第31巻第7号 p. 262-p. 271	花部英雄・常光徹・高木史人編「全国弁慶伝説総覧」

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
22. 書評「木田信子話・小倉広重編『キスカーこころのたまてばこー』一文字を知る伝承者のことなど」	単	1986年3月	昔話伝説研究会『昔話伝説研究』12号 P. 57～P. 65	鳥取県八頭郡若桜町の木田信子唄の伝えた78話の昔話集を分析・紹介した。そうして、木田唄が近代の学校教育を経て、読み書きに秀でていることから、文字を知る伝承者の一人だと位置づけ、海外の昔話をも我が物として撰取している背景を述べた。
23. 平清盛と平家の興亡	共	1985年4月10日	新人物往来社『歴史読本』第30巻第7号 p. 174-p. 189	高木史人・常光徹・花部英雄編「平家伝説総覧 付・伝説地地図」
24. 安東花唄のはなしー中・ほんとうのはなしー	単	1984年1月	自刊 全112ページ	安東花唄が「ほんとうのはなし」だと言ったものを、地域との関連を見るために、千代川下流から上流に遡る形で配列。これで、安東花唄の話した全207話揃い、一人の伝承者の説話伝承の世界が現れた。なお、下巻は民俗編を企画していたが、花唄死去のため、この巻で終わることになった。
25. 書評「阿彦周宜著『天楽丸口伝一遊芸の世間師』」	単	1983年3月	昔話伝説研究会『昔話伝説研究』12号 P. 57～P. 65	秋田県の人形遣い師の伝えた昔話を纏めた資料集を師、人生と昔話との交渉を意識して纏めた好著だと紹介した。
26. 安東花唄のはなしー上・むかしばなしー	単	1981年12月	自刊 全92ページ	初めてのフィールドワークでめぐり合った、鳥取県八頭郡用瀬町に住まいした安東花唄(1899年生まれ)のもとに、1977年以降20回以上通い、聴き集めた説話206のうち、「むかしばなし」だと本人が言ったものを107話収録した。
6. 研究費の取得状況				
1. 言語活動を示す動詞群の動態から見た口承文化相推移の研究	単	2019年6月から2020年3月	関西福祉科学大学 研究創成支援制度	研究代表者・高木史人
2. 保育所や幼稚園と小学校の連携に関する研究	共	2018年7月から2019年3月	関西福祉科学大学 関西福祉科学大学学長裁量経費	研究代表者・香田健治。研究分担者・生野金三、高木史人
3. 大学教員養成課程における「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニングの視点)」アプローチへの実践的研究ーカリキュラム・マネジメントの確立に向けてー	共	2018年4月から2019年3月	関西福祉科学大学 関西福祉科学大学共同研究	研究代表者・生野金三。研究分担者・香田健治、高木史人、湯川雅紀。
4. 「教職実践演習」の実践と課題	共	2017年4月から2018年3月	関西福祉科学大学 関西福祉科学大学共同研究	研究代表者・生野金三。研究分担者・香田健治、高木史人
5. 現行学校教育における「伝統」文化の分析及び活用の可能性についての総合的研究	共	2016年4月から2019年3月	日本学術振興会 科学研究費助成事業(学術研究助成基金) 基盤(C)(一般)	研究代表者・高木史人。研究分担者・伊藤利明、生野金三、立石展大、葛尾和宏、矢野敬一
6. 昭和初期の民俗学・口承文芸研究と隣接諸科学との影響関係についての基礎的研究	共	2012年4月から2016年3月	日本学術振興会 科学研究費助成事業(学術研究助成基金) 基盤(C)(一般)	研究報告書『「採集」という連携』(関西福祉科学大学高木史人研究室刊、2016年) 研究代表者・高木史人。研究分担者・飯倉義之、菊地暁、土居浩、真鍋昌賢、川村邦光

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2020年4月1日現在	日本文学協会、日本近代文学学会、日本児童文学学会、日本口承文芸学会、日本昔話学会、日本国語教育学会、説話・伝承学会、物語研究会、世間話研究会 会員
2. 2017年4月1日から2019年3月31日	日本口承文芸学会 運営理事・会長
3. 2015年4月1日から2017年3月31日	日本口承文芸学会 運営理事・研究例会委員長
4. 2013年4月から2015年3月	説話・伝承学会 委員
5. 2011年4月1日から2013年3月31日	日本口承文芸学会 運営理事・大会委員長
6. 2009年4月から2011年3月	日本口承文芸学会 運営理事・機関誌委員
7. 2005年4月から2007年3月	日本口承文芸学会 運営理事・研究例会委員
8. 2003年4月から2005年3月	日本口承文芸学会 理事
9. 2001年7月から2006年7月	日本文学協会 運営委員
10. 1999年4月から2001年3月	日本口承文芸学会 運営理事・機関誌委員
11. 1997年4月から1999年3月	日本口承文芸学会 運営理事・研究例会委員
12. 1993年4月から1995年3月	日本口承文芸学会 運営理事・機関誌委員長
13. 1991年4月から1993年3月	日本口承文芸学会 運営理事・機関誌委員
14. 1989年4月から現在	日本昔話学会 委員
15. 1987年4月から1989年3月	日本口承文芸学会 運営理事・機関誌委員
16. 1985年4月から1987年3月	日本口承文芸学会 運営理事・庶務委員